

## コプリック斑のわが国への受容

深瀬泰旦

はじめに

麻疹の歴史は、コプリック以前と以後の二つの時期にわけられるといつてよいであろう。コプリック以前には、麻疹の診断は麻疹の出現によってのみ可能であったが、コプリック斑の報告以後は、麻疹の出現に先だつカタル期にもその診断は可能となった。

コプリックの原著にあたってコプリック斑の様相を解明し、これがわが国の医学界に受容された状況をたどつてみたい。

### 一 コプリック斑の報告

ニューヨークのグッド・サマリタン病院の医師であるヘンリー・コプリック Henry Koplik (1858~1927) は、毎日の診療の中から、麻疹のカタル期に口腔粘膜にみられる特有な小斑点を発見し、これを麻疹の診断上重要な所見として一編の論文を発表した。<sup>(一)</sup>これが麻疹の早期診断にかくことのできないコプリック斑の報告である(一八九六年)。

この時期に口腔をみると、口峽の発赤と、全例ではないが軟口蓋に数箇の斑点をみることが出来る。頰部の粘膜と口唇の内側に、常にはっきりした発疹がみえる。それは鮮紅色を呈する、小さな不揃いの斑点で、それぞれの斑点の中心には、強い日光の下でみると、青味がかった白色の小斑点 a minute bluish white speck がみとめられる。青味をおびた白色の小斑点をもなった、これらの赤色の斑点は、麻疹の初期に特徴的な症候であり、皮膚の発疹に先だつ症状として信頼しうるものである。

とコプリックはのべている。さらに皮膚疹が最盛期になると、口腔粘膜の小斑点が消失してしまうことも確認している。

この論文の中でコプリックは、このような粘膜疹をかれ自身がはじめてみとめたのではないことを、それ以前のいくつかの文献をあげてのべているのは、まことに謙虚な態度といわなければならない。コプリックによれば、ルイ・スター Louis Starr ルイス・スミス Lewis Smith フロイス・マンナール Alois Bednar などの書物は、この斑点のことにまづたくふれていないが、一方アドルフ・バギンスキー Adolf Baginsky は「咽頭に赤色の斑点があらわれる」とのべており、アントワーヌ・バルテス Antoine Barthez とフレデリック・リリー Frederic Rilliet は「皮膚の発疹に先だつて生ずる咽頭の発赤をあげているだけであるという」<sup>(1)</sup> ウィリアム・オスラー William Osler の教科書には、「咽頭を検査すると、発赤と充血がみとめられることがあり、ある例では明瞭な点状の発疹をみとめることがある。ときにはこれが舌以外の口腔粘膜全体にひろがる」とある。<sup>(2)</sup>

さらにエデュアルト・ヘノッホ Eduard Henoch の教科書をみてみよう。本書は小児科学の近代化に功績があり、腹性紫斑病といわれる疾患の最初の報告者として名高いヘノッホがあらわした Vorlesung über Kinderkrankheiten (1881) で、私の手もとにあるのは、その第四版(一八八九年)をジョン・トムソン John Thomson が翻訳した英語版で、ここには口腔粘膜の発疹について次のようにしるされている。<sup>(3)</sup>

第二病日まで、とくに丈夫な子どもでは、硬口蓋と軟口蓋の各所にひろがった、瀰漫性の発赤がみとめられる。蒼白な口腔粘膜はかなりの程度に、いわゆる口蓋に点状、あるいは星形の赤い斑点の発疹を呈する。これが明らかにみとめられるときは、麻疹の発症の確固とした証拠と考えてよいであらう。

かなり核心をついた言葉であるが、発疹の状況の表現がいま一つはつきりせず、特定の発疹なり、斑点なりをさしていない所が弱い点であるといわざるをえない。

このようにおおくの人たちが見落していた所見を、細心の注意をはらってそれに注目し、その診断上の意義をみとめたということは、コプリックが並の臨床医でないことをしめすものである。

このように麻疹の早期診断に価値ある所見であるにもかかわらず、お膝下のアメリカでさえ容易にうけいられる様子はなかった。そこでコプリックはおいかけるように、第二の論文を発表した。ここではかれ自身が、“my eruption”とか“my spots”とか“my sign of measles”<sup>(四)</sup>とよんだコプリック斑の助けをかりて、簡単に診断をつけることができた麻疹の一六例を報告している。さらに第三の論文では、カラーの図版をそえ、それに「麻疹の診断上特徴的な所見（コプリック斑）」との説明をくわえている。<sup>(五)</sup>

コプリックの発見は、ベルリン大学小児科学教授オットー・ホイブナー Otto Heubner の注目をひいた。ホイブナーは、はじめ有名なカルル・ウンデルリッヒ Karl Wunderlich の弟子となつて内科を学び、のち小児病理学から小児科にはいった。患者の脳脊髄液から流行性脳脊髄膜炎菌をはじめ分離して報告し（一八九六年）、小児の必要熱量をきめるなど、栄養学の分野でも輝しい業績をあげている。一八九四年にはじめての小児科学教授としてベルリン大学の正教授に就任したホイブナーが関心をしめしたことから、コプリック斑はドイツやオーストリアでひろくみとめられるようになった。<sup>(六)</sup>

イギリスでは、一八九九年のエジンバラでの麻疹の流行にさいして、ガランド G.L. Gulland がコプリック斑の診断上の重要性をみとめたことよって、麻疹の早期診断にひろくもちいられるようになった。<sup>(七)</sup>

## 一 一 わが国におけるコプリック斑の受容

欧米各国がコプリック斑の重要性をみとめてゆく中であって、わが国ではこれがどのように受容されていたであろうか。

わが国の近代小児科学の最初の教科書である弘田長の『児科必携』が出版されたのは、明治二十一年（一八八八）のことである。これにはもちろん、コプリック斑についての記載はない。

現在の『日本医事新報』にあたるような性格をもった雑誌として、当時の医師たちにひろくよまれていた『中外医事新報』に、コプリック斑の記事がはじめてあらわれたのは、明治三〇年（一八九七）五月五日発行の第四一一号であった。摘録欄に外国文献の抄録として、その前年の *Arch. Pediatr.* についたコプリックの原著の抄訳である。<sup>(八)</sup>

麻疹ノ毒ヲ受ケテヨリ四十八時間内ハ結膜炎、軽度ノ熱咳嗽等ノ諸症ヲ発スルニ過ギズ、此時ニ方リテ皮膚ニハ未タ発疹セサルニモ拘ラズ、其口腔ヲ検スルトキハ咽頭発赤シ、口腔粘膜及ヒ唇ノ内面ヲ精驗スルトキハ其面ニ帯褐赤色ノ小斑点アリ、強キ日光ニテ之ヲ熟視スルトキハ各斑点ノ中心ニ帯灰白色ノ小点アリ、是レ実ニ麻疹ノ初期ノ一徴ナリトス。猩紅熱ニハ口内粘膜侵サルルコトナキヲ以テ両者ヲ区別スベシ、亜布答ハ口内粘膜ヲ侵セトモ其斑ノ色互ニ同シカラズ、風疹ハ口内粘膜ニ発疹スルコトナシ

流行性感冒ト麻疹ノ初期トハ相似スルコトアレトモ、流行性感冒ニハ口内粘膜ノ疹ナシ

歴史的に有名なコプリックの論文を上手に抄訳してはいるが、原著においても「pathognomonic」といふ重要な言葉を、この抄訳では的確に翻訳していないのは、何とも残念なことである。さらに冒頭にある「麻疹ノ毒ヲ受ケテヨリ四十八時間云云」は、誤解をまねきやすい文章である。現今の言葉をもってあらわせば、これは麻疹の感染があつて四八時間にして症状の発現がみられる、ということになるが、麻疹は感染後、九—十一日の潜伏期の後に発症することとはよくしられた事実である。これはおそらく「Invasion」を「麻疹ノ毒ヲ受ケ」と解釈したために生じた誤りで、コプリックの原著についてみると、この「Invasion」は「かれ自らが「疾病の発現」と定義づけていることをのべておこ

う。

以後明治三三年までに三編の記事がみられるが、いずれも外国文献の抄訳である。「麻疹診断上コクリック氏疹ノ価値」と題するファンケルスタインの論文 (*Berl. klin. Woch.* 所収) には、「此ノ疹ノ存在ハ確カニ麻疹ト熱性病殊ニ『インフルエンザ』トノ鑑別上必要ニシテ唯注意スヘキハ細小ノ『アフテン』ト誤認スルコトナキヲ要ス」とある。<sup>(九)</sup> さきの論文といい、これといい、カタル期においてとくにインフルエンザとの鑑別診断をとりあげているのは印象的である。

第二のエル・ハウアスの抄訳も「Über des Koplik'sche Frühsymptom bei Masern」 (*Wiener med. Presse* 所収) として、コプリック斑の診断上の意義をみとめているが、<sup>(一〇)</sup> マナッセの抄訳 (*Munch. med. Woch.* 所収) では、「此ノ斑ハ往々麻疹ノ早期症トスルノ価値アルモ、未ダ孰レノ場合モ此斑ノ有無ヲ以テ麻疹ヲ診定スルヲ得ズト結論セリ」とのべて、麻疹の早期診断におけるコプリック斑の意義について疑いをさしはさんでいる。<sup>(一一)</sup>

このような医学雑誌の記事をうけて、弘田長の『儿科必携』も第六版 (明治三四年) になると本文の記載の体裁もおおいにあらたまり、初版においてみられた治療法を中心とした編集から、個々の疾患についてまず原因の項をたて、ついで症候、療法とつづいて、今日の教科書の様相を呈してくる。その麻疹の項には、本文にくらべて一段と小さい活字で



米國「ニューヨーク」ノ「コプリック」氏ガ麻疹発疹前ノ初兆トシテ口粘膜中下顎臼齒ニ相對スル頬粘膜ノ部ニ不正形状ノ紅斑アルコトヲ報道シテ以來小兒医ノ贊同スル者少ナカラズ

との記載があつて、<sup>(一三)</sup>コプリック斑が小兒科医の間で市民権をえつつあるものの、確固たる地位を獲得していない状態をすることができる。

この状態はさらに数年はつづき、明治三〇年代の末になつてもコプリック斑についての評価がさだまらず、黒岩直記は明治三八年の日本小兒科学会福岡地方会の席上

Koplik 氏斑ハ……初メテ麻疹ニ確實ノ診定ヲ与エ早期ニ診断シ且ツ他ノ急性発疹病ト類症的鑑別ヲナスニ唯一ノ徴候タルコト世ニ知ラルルニ至レリ然レトモ尚ホ且ツ一部ノ学者間ニハ之レニ異義ヲ稱フル人ナキニアラズ

とのべて、外国の文献として六%、あるいは二一%の発現率しかないとの報告をあげている。わが国でも否定的な報告がおおく、「我國ニ於テハ二三ノ非認的報告ニ接セル而已ニシテ承認的ノ報告ヲナセルモノ余ノ寡聞ナル未ダ之ヲ耳ニセズ」<sup>(一四)</sup>とのべている。

その一、二の例をあげると、明治三五年五月一九日に東京帝国大学・医科大学小兒科学教室においておこなわれた小兒科学会第二回常会の席で、浅田繁太郎が、二年以内の経過で三回の麻疹感染例（二歳一ヶ月女児）を報告しているが、ここでは診断根拠としてコプリック斑についてまったくふれておらず、長田重雄、小原頼之、福井信政ら三名の追加発言者も、コプリック斑については一言も言及していない。<sup>(一四)</sup>

下條菸菟吉は明治三七年の一月から七月までに経験した八七例の麻疹患者について報告しているが、「前駆期ニ於テ歐

米学者ノ是認スルコプリック氏斑点ノ如キモノヲ一名モ実験セス」とのべている。<sup>(一五)</sup>ここにいう実験というのは、当時の用語例ではこれを実験の経験、あるいは体験とよみかえるべきものである。

さらに明治四〇年の東京地方会でも、藁科松伯が「麻疹ニ就テ」の報告の中で、

向フノ人ハ此コプリックノ斑ニ付テハ大変ニ価値ヲ置イテ、種々研究報告ヲシテ居リマスルガ、我国ニ於キマシテハ如何デアリマスルカ、……私ノ実験ニ於キマシテハ……ドウモ此コプリックノ斑ヲ類リト調べマスルケレドモ、余リ見当リマセンノデアリマス。

とのべて、発現率が低いことをうらづけている。<sup>(一六)</sup>

しかしこの藁科松伯の発表にたいして討論にたった伊東祐彦（京都帝国大学・福岡医科大学教授）は、麻疹の大多数においてコプリック斑をみとめるとのべた。それはさきにもべた教室の一員である黒岩直記の報告を根拠にしたもので、前半で文献的考察をくわえた黒岩は、その論文の後半部分で、四五例の麻疹患者のうちコプリック斑をみとめなかったのはわずか一例にすぎず、他は前駆期において二七例、発疹期に一七例、計四四例にコプリック斑をみとめたといふ。<sup>(一七)</sup>

はたして日本の麻疹では、コプリック斑の出現率が実際に低いのであろうか。われわれ臨床家はいろいろな症状や所見にはじめて接したとき、それを同定することにきわめて困難を感じるの、しばしば経験するところである。教科書をよんで、そのものの本質なり性状なりを理解したつもりでも、それが目の前に存在しながら見落してしまふことはよくあることである。君、これがコプリック斑だよ、と先輩にしたしく教えをうければ、次からは見落すことはまずないものである。藁科の報告にたいし、討論にくわわった波多野俊太郎もこの間の事情をのべている。<sup>(一八)</sup>

今年ノ麻疹流行ニ就テ、コプリック氏斑ヲ注意シテ見タイト考へ、二三ノ書物ヲ見マシタガ、ドウモイロイロニ書イテアリマス。ソレニ自分ガ、是ガコプリック氏斑デアルト云ツテ指導ヲ受ケタ事ハゴザイマセスシ、大キニ困リマシタ。ソレカラ小児科医局ヘ行ツテ先生方ニ伺ヒ、又図ヲ拝見シマシテ大イニ得ル所ガゴザイマシタ。

このようにしてコプリック斑を眼底につよくやきつけた者にとつてはその発見は容易となり、波多野俊太郎はつづいて「自分ノ見マシタノデハ可ナリ多数、殆ド三分ノ二、或ハ其以上モコプリック氏斑ヲ認メルヤウニ考ヘマス」とのべている。些細な例にすぎないかもしれないが、こんな所にも臨床医学のむつかしさがみられる。

日本小児科学会第一二回總會（明治四〇年）で、麻疹の血液変化についてはじめて報告した京都帝国大学医科大学の本庄謙三郎は、一二例の患者のうち一〇例にコプリック斑をみとめ、診断根拠としてコプリック斑をあげている。<sup>(一七)</sup>このように、明治四〇年（一九〇六）ごろにはコプリック斑の診断価値はひろくみとめられるようになった。

このような状況をうけて、『眼科必携』の第一二版（明治四二年）になると、第六版では本文とは別に小活字でしるされてきたコプリック斑についての記述は本文にくみこまれ、断定的な表現をもちいてひろくみとめられてきたことをしめしている。<sup>(一八)</sup>

此前駆期第二日ノ終ヨリ口腔粘膜ニ白点アル帽針頭大ノ暗赤色若クハ赤色斑数箇ヲ屢々認ムルコトアリ「コプリック」斑即之ナリ多クハ麻疹ノ前兆トナル



### 三 その後のコプリック斑の記載

現今のように写真技術の発達した時代であっても、疾病の症状なり所見なりを正しい色調で再現することは、決して容易なことではない。これが一八〇〇年代のことであれば、その困難なことはいうまでもなく、コプリックの原著も図版一つはいいない、まったく文字だけの報告である。コプリックによると、コプリック斑は次のように説明されている。<sup>(1)</sup>

*On the buccal mucous membrane and the inside of the lips, we invariably see a distinct eruption. It consists of small, irregular spots, of a bright red color. In the centre of each spot, there is noted, in strong daylight, a minute bluish white speck. These red spots, with accompanying specks of a bluish white color, are absolutely pathognomonic of beginning measles, and when seen can be relied upon as the forerunner of the skin eruption.*

これがわが国の医師によって表現されている所をみると、さきにもみたように<sup>(八)</sup>

口内粘膜及ヒ唇ノ内面ヲ精検スルトキハ其面ニ帯褐赤色ノ小斑点アリ、強キ日光ニテ之ヲ熟視スルトキハ各斑点ノ中心ニ帯灰白色ノ小点アリ

となつている。ここでは形状も色彩も、色調もコプリックののべている所を正しく翻訳しているとはいいがたい。

フィンケルシュタインの抄訳では、これが「弱赤色ヲ呈スル粘膜上ニ生スル帯血色ノ白色丘疹ニシテ口腔粘膜ノ各部ニ

点々散在スルコトアリ」となっており、『児科雑誌』にのる抄訳もこれとまったく同じ文章である。<sup>(九)</sup> 両誌の発行年月日が、二〇日しかずれていないことから考えて、同一人物による訳文が両誌に掲載されたものと考えられる。さらにマナッセの論文の抄録には「コプリック氏斑トハ口腔及頬粘膜ニ呈スル鮮紅色ノ小斑ニシテ、其形状ハ不規則ニシテ斑ノ中央ハ帯青白色ノ光輝ヲ帯ブル者ヲ謂フ」とあつて、コプリックの原著にもっとも近い表現である。<sup>(一〇)</sup>

これらの記事をよんだだけでは、コプリック斑の形状と色調を正しく理解することは仲々むづかしいのではないかとおもわれる。さらにこのようにその表現がまちまちであるのは、必ずしも翻訳によって生じたズレばかりとはいえない節もある。コプリックの母国であるアメリカ合衆国で刊行されたもっとも有名な小児科学の成書であるネルソンの教科書(第六版 一九五四年)では、

The Koplik's spots are grayish-white dots, usually as small as grains of sand, with a slight reddish, mottled areola around them; occasionally, they are hemorrhagic. They tend to occur on the buccal mucosa opposite the lower molars, but may spread irregularly over the rest of the buccal mucosa.

とあつて、“bluish white speck”が“grayish-white dots”とかえられてゐる。<sup>(一〇)</sup> 青白色でも、灰白色でもさしたる差はないではないか、といつてしまえばそれまでであるが、折角コプリックが詳細に記述している以上、これを安易にすてさつてしまうのはいかなるものであろうか。この点に関しては、クルークマンの『小児伝染病学』(第六版 一九七七年)は細心の気くばりをしており、コプリックの原著をそのままひいて、コプリック斑の説明としているのは、心にくいばかりの編集ぶりである。<sup>(一〇)</sup>

#### 四 口腔粘膜の小斑点の歴史

麻疹のさいに口腔粘膜に発疹（粘膜疹）がみられることは、コプリック以前からみとめられており、口腔粘膜に生じた白い小斑点が、早期診断にさいして重要な手がかりになることも古くから知られていたようである。アルブレヒト・パイパー Albrecht Peiper はその小児科学史の中で、それをみとめた医師としてジョン・キール John Quier<sup>(11)</sup>、マーレイ J.A. Murray<sup>(12)</sup>、ロイホルト Reubold<sup>(13)</sup>、ゲルハルト C. Gerhardt<sup>(14)</sup>、ボーン Bohn<sup>(15)</sup>、フリント N. Flindt<sup>(16)</sup>、フィラトフ N. Filatow<sup>(17)</sup> をあげているが、ここではフィラトフをとりあげてみたい。

小児にみられる発疹性の疾患に、麻疹、風疹、猩紅熱につづいて、第四番目に位置する疾患として「第四病」あるいは「フィラトフ・デュークス病」がある。いまではまったくみられなくなってしまったが、戦前から戦後の早い時期にかけての教科書には記載されていた。<sup>(18)</sup> この第四病との関連でわれわれの記憶にあるフィラトフは、モスクワ大学の小児科学教授で、ロシアばかりでなく、世界の小児科学界に偉大な貢献をしたロシア小児科学の父として有名である。

フィラトフは一八八五年、麻疹の前駆期において、口腔粘膜に白斑にかこまれた、小さな赤色斑を記載した最初の一人である。さらにそれよりすこし以前に、地方の医師ベルスキー Belsky<sup>(19)</sup> も、この所見を報告しているので、ソ連ではこれをフィラトフ症候、あるいはベルスキー・フィラトフ症候とよんでいる。この記載をみるかぎり、フィラトフの報告はコプリックのそれより一〇年ばかり早いことになるので、コルティピン A. Koltypin<sup>(20)</sup> は、ロシアの医師に先取権があるにもかかわらず、外国の文献ではこれがコプリック斑として知られている、とのべている。<sup>(21)</sup>

さらにコルティピンは、フィラトフが「第四病」を発見したのは、イギリスの医師クレメント・デュークス Clemente Dukes<sup>(22)</sup> より一五年早いし、伝染性単核症をエミール・パイフェル Emil Pfeiffer<sup>(23)</sup> より三年早く発見していると、フィラト

1の先取権をはなばなく主張している。(二四)

## むすび

一八九六年に発表されたコプリック斑が、わが国の医学界に定着するのに、約一〇年の歳月が必要であったことを、当時の文献についてくわしく検討した。コプリック斑の性状をコプリックの原著を引用しつつ解明したが、コプリックがその論文の末尾のべている言葉をあげてむすびとしたい。(二)

麻疹の初期において、頬部口腔粘膜の斑点は数がすくないので、もし注意深く探さないと見落してしまう。だから窓からの強い日射しのもとに患者をおき、口をあげさせて、頬の外側をおさえながら、舌庄子か人さし指で頬粘膜を圧迫することが当をえた方法である。

稿をおわるにあたり、ご指導、ご校閲をいただいた順天堂大学酒井シツ助教授に感謝いたします。

(東京慈恵会医科大学講師  
順天堂大学医学部医史学研究室)

## 注

- (一) Koplik, Henry: The Diagnosis of the Invasion of Measles from a Study of the Exanthema as it Appears on the Buccal Mucous Membrane. *Arch. Pediatr.* 13: 918, 1896
- (二) Osler, William: The Principles and Practice of Medicine 2nd ed., Young J. Pentland, 1897 p. 82

- (三) Henoch, Eduard: Vorlesung über Kinderkrankheiten 4 Auf., 1889 John Thomson trans.  
Lectures on Children's Diseases, The New Sydenham Society, 1899 2 vol. p. 242
- (四) Koplik, H.: A New Diagnostic sign of Measles, *Medical Record*. 53: 505 (1898)
- (五) Koplik, H.: The New Diagnostic Spots of Measles on the Buccal and Labial Mucous Membrane, *Medical News* 74: 673, 1899
- (六) Slawyk: Ueber das von Koplik als Frühsymptom der Masern beschriebene Schleimhautexanthem, *Deutsch. med. Wochenschr.* 24: 269, 1898
- (七) Bett, W.R.: Some Paediatric Eponyms—II Koplik's Spots, *Brit. J. Child. Dis.* 28: 127, 1931
- (八) コプリック 麻疹ノ初徴 中外医事新報 四一—四二頁 明治三〇年
- (九) フキンケルスタイン 麻疹診断上コプリック氏疹ノ価値 中外医事新報 四六一—四三二頁 明治三二年  
なおこれと同じ原論文が、「麻疹前駆期ニ於ケルコプリック氏疹ノ価値」として『児科雑誌』(一六号四四頁 明治三一年)に抄訳されている。
- (一〇) ヘル・ハウアス コプリック氏麻疹早期症候ニ就テ 中外医事新報 四六九号二六頁 明治三二年
- (一一) マナッセ 麻疹ニ於ケルコプリック氏斑 中外医事新報 四九五号三〇頁 明治三三年
- (一二) 弘田 長 児科必携 増訂六版 三三四—三四四頁 明治三四年
- (一三) 黒岩直記 「コプリック」氏斑ニ就テ 児科雑誌 六六五号五頁 明治三八年
- (一四) 浅田繁太郎 児科雑誌 三五号三六頁 明治三五年
- (一五) 下條葵菟吉 本年流行ノ麻疹ニ就テノ余ノ卑見 児科雑誌 五四号六〇頁 明治三七年
- (一六) 薬科松伯 麻疹ニ就テ 児科雑誌 八八号五五頁 明治四〇年
- (一七) 本庄謙三郎 麻疹ノ血液変化 児科雑誌 九五号六一頁 明治四一年
- (一八) 弘田 長 児科必携 増訂一版 四一八頁 明治四二年
- (一九) Nelson, W.E. ed: *Textbook of Pediatrics* 6 ed. W.A. Saunders, 1954, p. 468
- (二〇) Krugman, S., Ward, R. and Katz, S.: *Infectious Diseases of Children* 6 ed. C.V. Mosby, 1977 p. 134
- (二一) Peiper, A.: *Geschichte der Kinderheilkunde in Opitz, H. and Schmidt, F.: Handbuch der Kinderheilkunde,*



Springer, 1971, S. 20

- (一二) 和泉成之助、チユーク・フニラトウ氏病 日本小児科全書 第二一編第二冊 一五一頁 金原出版 昭和二八年
- 鎮目専之助 第四病 小児科学 第二版 下巻 三九四頁 金原出版 昭和二七年
- (一三) Koltypin, A. et al.: Children's Diseases Mir Publishers, 1966 p. 379
- (一四) Koltypin, A. et al.: *ibid* p. 14~15

## The Acceptance of Koplik's Spot in the Japanese Medical World

by Yasuaki FUKASE

Koplik's spot, discovered by Henry Koplik (1858~1927) in 1896, is a pathognomonic symptom of measles. John Quier and other many doctors discovered enanthema on the buccal mucous membrane, but Koplik was the first to evaluate the enanthema correctly in the diagnosis of measles.

After Japanese doctors read the translated summary of Koplik's original paper on "Chugai-izi-shimpo" No. 411 (May 1897) for the first time, many discussions were held in meetings of the Pediatric Society on the meaning of Koplik's spot. The view was put forward that Koplik's spot might appear only seldom in cases of measles in Japan during these discussions. On the other hand, reports that Koplik's spot was regarded as pathognomonic gradually increased and the significance of Koplik's spot was widely recognised by Japanese doctors by about 1907, nearly ten years after Koplik's discovery.